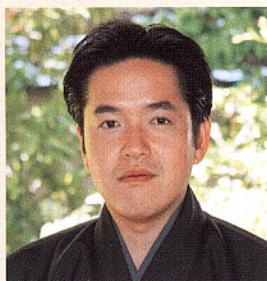


# 石註

ISHIZUE

題字 而妙斎宗匠

## 「わび、さび」のこころ ————— 表千家若宗匠 千 宗員



「わび、さび」が茶の湯の理念を表す言葉であることは、今日、多くの人が認識しています。これらの語は、茶の湯のみならず、日本人の美意識や思想を表す言葉として、古くから用いられてきました。では、これらが意味するところを、はたしてどれくらいの人が理解しているのでしょうか。

昨年6月、表千家米国東部支部が発足し、ニューヨーク、ワシントンにおいて献茶式や茶会などの行事が催されました。その一連の行事で、静岡文化芸術大学学長の熊倉功夫先生にご登壇いただき、茶の湯文化についての講演をしていただきました。現地の人たちを対象にした講演ですから同時通訳をまじえてのことになるわけですが、その中でも、特に「わび」「さび」の語については、通訳の方が言葉を足して、自身の解釈もふまえて説明しておられました。つまりこれらの語は、単なる直訳では海外の人に通じない、日本独特の言葉なのです。

これらは、本来はいずれも否定的な意味を表す言葉です。「わび」は「侘びしい」につながりますし、「さび」も「寂しい」「錆びる」など

を連想させます。そうした否定的な意味を持つ語が、日本人の美意識を表す言葉として転化されたところに日本人の繊細な感性があらわれているといえるでしょう。

「わび、さび」と聞いて、皆さんはどんなものを想像するでしょうか？「不足の美」ともいわれますし、また茶の湯においては、装飾性をそぎ落とし究極にまで造型を突き詰めた長次郎の楽茶碗などは、まさにそうした美意識を象徴するものといえるでしょう。また、「わび、さび」という語は、たんなる美的な意味だけでなく、人間の内面性を言い表す言葉でもあります。「美意識」や「美学」という言葉は、たとえば「引き際の美学」などの例のように、時として人間の行動における価値観を表す語としても用いられます。同じように「わび、さび」も人間の心の働き、すなわち茶の湯に携わる人間の意識や理念にまで言及する言葉なのです。そして、こうしたこととは西洋的な概念にない、日本人独自の世界観といえるものなのです。四代江岑宗左は、自身が著した茶書のなかで「茶の湯の根本はさび」であり、さびとは、その「心持ち（心構え）が大切である」と記しています。皆さんも日々のお稽古を通して自身の心と向き合い、茶の湯の心とは何なのかを見つめていただきたいと思っております。

## 茶杓 その1

茶杓は、元々中国で薬をすくうために使われていた薬匙が始まりで、イモの葉茶杓と言われイモの葉形の匙に柄をつけ、薬を破碎する目的でその根元の先は球状っていました。茶の湯が成立する以前は、象牙製や金属製のこのような薬匙が抹茶を茶碗に入れるための道具として用いられていました。

しかし、室町時代に茶の湯が成立し亭主が客の前で点前をしてお茶をたてるようになると、それまでの金属製の茶杓では不都合が起こりました。

村田珠光は日本で手に入れにくい象牙の茶杓にならって竹で代用することを考案し、門人の珠徳に削らせました。珠光の竹茶杓は節がなく長めで、今日の真の茶杓と呼ばれるものです。漆で拭いて光沢を出しています。紹鷗は珠光の節のない茶匙にさらにきり止めのところに節を取り入れた茶匙を工夫しました。さらに利休はこの節を中節に取り入れ、竹の持つ節の美しさを取り入れました。元伯宗旦はそれまでの漆で拭いた茶杓に対して自然のままの竹の生地を生かして素朴なわび茶杓へと変えました。茶杓には多少の例外はあります、大部分は下削りといつて影の作者があります。珠光の珠徳、紹鷗の羽淵、利休の慶首座、甫竹などが有名です。

利休の頃までは、茶杓はおりだめと称して一回使うだけという単なる消耗品でしたが、やがて先人敬慕の精神から使い残りの茶杓を筒に入れて保存するようになりました。また、筒に入れて保存するとともに銘が付けられるようになりました。銘は宗旦、遠州の時代以前は銘のないものが多く、送り筒の場合宛名がそのまま銘の役割を果たしていました。筒の種類には、茶杓と同じ竹で同一作者の手による筒、「共筒」、別に新たに作られた筒、「変筒」、茶杓の作者以外によって後に作られた筒、「追筒」などがあります。

後世になって、茶の湯が次第に風流ごとになるに



イモ茶杓

覚々斎作共筒茶杓  
銘 蟻とおし

つれて銘も歌銘、句銘、などと文学的なものになってきました。一見して茶杓は一遍の竹ヘラにすぎず、造形的にも単純な物ですが、実際に手に触れることによって茶杓ほど師や先人への敬慕の心を直接に感じるものは他にはないと思われます。ある茶会で利休の茶杓を持った客が、「私は今利休さんと握手をしているのですね」と言いました。まさに茶杓とはそういった価値のあるものがあります。みなさんもそういう目で茶杓を見てください。

古田織部は利休が切腹する際に茶杓を譲り受け、利休の死後その茶杓を中央に窓を開けた筒に茶杓を入れ、朝夕利休の位牌代わりとしてこの茶杓を拝んでいました。この茶杓は銘を「涙」といい現在名古屋の徳川美術館に所蔵されています。

六代覚々斎は子供たちに「蟻通し」、「花の影」、「花可」を、それぞれ長男如心斎、次男最々斎（今日庵七世）、三男又玄斎（今日庵八世）に贈りました。蟻通しの銘は、唐から贈られた七曲の玉に糸を通せという難題が与えられたときに、蟻に糸をくくりつけて玉の穴に入れ、穴の反対側に蜜を置いたところが、蟻は蜜を求めて七曲の穴を潜り抜け、糸を通して通すことができたという故事に由来しています。

茶杓にも他の道具と同じように格があります。格は茶杓の材質や形によって区分されます。一般に竹製が多いので「茶杓=竹」のイメージがありますが、象牙製、木製、塗物などさまざままで、真行草に分けられ他の使う道具によって使い分けられます。使い分けとしては、古い象牙とか竹の利休時代以前の古杓の場合は、真の扱いとして唐物や名物のものなど由緒ある茶入れの場合に使われ、木、べっ甲などは草の扱いとして、気楽なお茶のときに使われます。

茶杓は作者によって独特の形があり、茶会へ行き茶杓を見て誰が作った茶杓かを考えるのもどころの一つです。

## 千 宗旦 ④

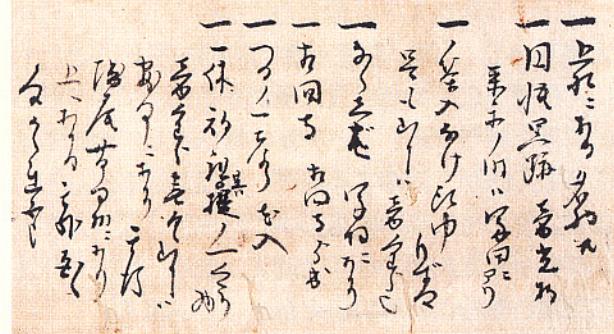
寛永10年（1633）1月、宗旦は三男の江岑宗左を茶堂として仕官させるため、江戸へ送り出しました。そして翌2月には、宗旦と懇意であった大徳寺の玉室宗珀の仲介により、江岑は唐津藩（現在の佐賀県）藩主、寺沢志摩守広高の茶堂となることができました。寺沢志摩守は茶の湯をよくした大名で、利休とも面識があり、利休の茶会に招かれたこともあります。宗旦にとって、寺沢家は江岑の仕官先として満足のゆく大名家でした。

ところで、表千家には、宗旦が江岑宗左をはじめ息子たちに宛てた二百通を超える手紙が残されていて、「元伯宗旦文書」と呼ばれています。これらの手紙を読むと、宗旦が息子たちを仕官させるために一生懸命であったことがわかります。そして、いつも息子たちのことを気にかけていた父親としての気持ちがよく伝わってきます。それでは、実際に宗旦の手紙を見てみましょう。

江岑の寺沢志摩守への仕官が決まった直後、寛永10年2月12日付の手紙には、「（私は）茶の湯のことは何もわかりませんので、殿様に教えていただきながら（茶堂を）勤めます、と申し上げなさい」といった文面があります。それは、殿様の前で決して物知り顔をすることなく、あくまでも謙虚な姿勢で茶堂を勤めなさい、という忠告でしょう。つまり、宗旦は江岑に、茶堂として仕えるにあたっての心がまえを言い聞かせているのです。

また、同年の4月27日付の手紙には、「上様（徳川將軍家）ニある名物共」をはじめとして、名物道具の由来や所在が記されており、この記述が手紙の大半を占めています。名物道具とは、茶の湯の道具のなかでも、伝来や由緒を持ち、銘が付けられ、古くから茶人の間でとくに大切にされてきた有名な道具です。宗旦は、自らの記憶するかぎりにおいて、どのような名物道具が、今どこに所蔵されているか、どのような由緒があるのか、といった情報を江岑に伝えたのです。

ことに大名家は、こうした名物道具に深い関心があり、実際に多くの大名が所蔵していたのです。寺



元伯宗旦書状 江岑宗左宛 寛永10年4月27日付

この書状には名物道具のことが多く記されているが、たとえば「上様ニある名物共」として、この時徳川將軍家には、珠光が所持した円（圓）悟の墨跡と、頭巾の茶入、ならしば（楮柴）の茶入、相国寺茶入、鶴の一声花入、一休宗純の墨跡などがあったことを伝えている。

沢志摩守も名物の唐物の丸壺茶入を所持していて、これは所有者の名にちなんで「寺沢丸壺」と称され、有名なものでした。ですから、名物道具に関する情報や知識は、大名家の茶堂にとって非常に重要だったのです。

このように、宗旦は江岑が大名家の茶堂として勤めを果たせるように、心がまえや必要な情報を手紙に書いています。

さて、寺沢広高は、江岑が仕官してから間もなく亡くなってしまいますが、江岑は、広高の家督を継いだ堅高に引き続き仕官することができました。ところが、寛永15年（1638）、堅高は自らの領内でおこった島原の乱の不始末を問われ、幕府より領地を没収されてしまいます。そのため、江岑は寺沢家を離れることになりました。

次に、江岑は四国高松の大名、生駒家に仕官しますが、それから間もなく、お家騒動がおこって生駒家は取潰しとなつたため、江岑は仕官先を失いました。

しかし、宗旦は江岑を新たな大名家に仕官するために力を尽し、寛永19年、紀州徳川家への仕官がかなつたのです。そして、江岑以後、幕末に至るまで、およそ250年にわたり、表千家代々の家元は、紀州徳川家に茶堂として仕えることになります。

### 奈良県立医科大学茶道部

西山 大地

奈良県立医科大学は創立 60 余年の伝統ある医科大学であり、「高い教養と専門的能力を培うとともに、成果を広く地域社会に提供することにより社会の発展に寄与する」ことを基本理念とし、全国各地の多数の病院で活躍する医師・看護師を輩出しています。その格式高い校風の中で奈良県立医科大学茶道部は今年で創部 26 年を迎え、部員一同益々作法の上達と精神の研磨に日々精進しています。

部員は約 20 名で男性 5 人・女性 15 人程で構成されており、医学科・看護学科それぞれの学生が共に仲良く楽しく茶道を学んでいます。ほとんどの部員が大学から茶道を始めた人ばかりです。お稽古は大学の近くの井倉宗陽先生の教室に通わせてもらっています。月に 4 回程は医大生向けのお稽古を開催していただき、月に数回は一般の人向けのお稽古に参加させてもらっています。また大学の大講堂内にある自作の畳の空間で自主練習をしたり、紹介していただいたお茶会に参加したりと、授業や実習で忙しくても各人が自分のペースで無理なく茶道が学べる環境を整えてもらっています。また部員のほとんどが他のクラブと兼部をしており、勉強もクラブもバイトも遊びも頑張る、正に文武両道をさらりとこなす部員が揃った暖かい雰囲気の部となっています。

年間行事は、万葉ホールでのお茶会や大学祭でのお茶席、御家元見学、短期講習会、追い出しコンペ、新入生歓迎会などがあり、それぞれのイベントを通して各人が目標を決めてスキルアップに励んでいます。

記念すべき創部 25 周年の 2009 年 3 月には安倍晴明で所縁のある安倍文殊院をお借りして、創部以来初めてとなる学生茶会を開催することができました。何もかもが初めてのことで準備やお稽古がとても大変でしたが、井倉先生を初め社中の方々や親御さんの御協力もあり、大成功で終えることができました。そのお茶会を通して、お客様が私達のために足を運んでくださることの有り難さや喜んでくださった時の嬉しさ、心からおもてなしをしたいという気持ちを各人が身をもって体験することができたと思います。

その勢いを継続し、2010 年 3 月には権原万葉



ホールの茶室をお借りして第二回お茶会を開催することができました。丁度平城遷都 1300 年祭ということもありテーマを「南都七大寺」とし、それぞれのお寺に所縁のあるお道具やお菓子を取り揃えて催すことができました。大学の近くということもあり偉い先生方から親御さん、学生（友人）まで幅広い方々に楽しんでいただけました。写真はその時のものです。

私達は将来医師や看護師として病める人に手をさのべる職業に就きます。一人一人の人の相手とし、その人のことを思いやって最高の医療を提供するという意味ではお茶の精神と相通じる物があると思います。病院実習をしていてもたまたま担当した患者さんですがその人が何を必要とされているか知りたいと思うしその患者さんから多くのことを学ぶこともあります。一つ一つの出会いがとても大切で時に自分の人生に大きく影響することすらあります。そういう人と人との関わりやつながりが特に医療の場では顕著ではないでしょうか。そのある意味一期一会の繰り返しの場で将来働く身として、今茶道の精神に触れられていることはとても貴重だと思います。茶道を通して得た思いやりの心や人とのつながり、暖かい気持ちや豊かな精神を大切にして、今後も社会で活躍していきたいと思っています。

最後になりましたが、茶道を通して教育・指導してくださり医療人の卵達を温め見守ってくださっている井倉先生を初め、社中の方々に深く感謝したいと思います。

## 筑紫女学園大学茶道部

今村 涼子

筑紫女学園短期大学表千家茶道部を引き継ぎ、平成3年4月に大学表千家茶道部を創立、今日に至っております。現在、21名の生徒が所属しており、毎週水曜日に占部貞世先生と副指導の高木満由美先生のご指導のもと、日々のお稽古に励んでおります。活動場は大学構内に隣接している「悦目亭」というお茶室を開放し、茶道のお点前に限らず、礼儀作法やお道具の歴史なども教わりながら、充実した活動を行っております。

活動は週のお稽古だけに留まらず、季節ごとに行われる学校のイベント、4月の新入生オリエンテーション、7月のオープンキャンパス、そして11月初めに開催される学園祭は、私どもの活動の中では最も大きなイベントで、毎年紅白幕を張り、お席をかけてお客様をおもてなしします。

私どもにとって「茶道」とは、人と人とのつながりを改めて考えせるものであり、そして自分自身を冷静に見つめる大切な時間でもあります。これからも思いやりの心を持つこと、礼儀作法を身につけること、そしてお茶を楽しむことを追求し、茶道についてより多くのことを学ぶ事に精進していきたいと思います。



## 筑紫女学園高等学校茶道部

光武 美砂子

筑紫女学園高等学校の表千家茶道部は、戦前より活動してきました。戦後、昭和24年から平成13年まで故牛尾アサ先生が御指導してこられ、現在は長年副指導者として務めてこられた占部貞世先生と、本校の卒業生で表千家茶道部員であった副指導者の西田紀子先生のもとで、毎週木曜日に部員40名で活動しております。

校内には「香風亭」と「洗心庵」の2つの茶室があります。なかでも「洗心庵」は昭和15年に建てられた茶室で、市内中心部であるにもかかわらず、戦火を免れました。今では福岡市内で最も古い茶室の一つとも言われています。そこでは表千家をはじめ、裏千家、大日本茶道学会、藤陰流煎茶の4流が活動しており、創立記念日や文化祭などでは、お茶会も開いております。

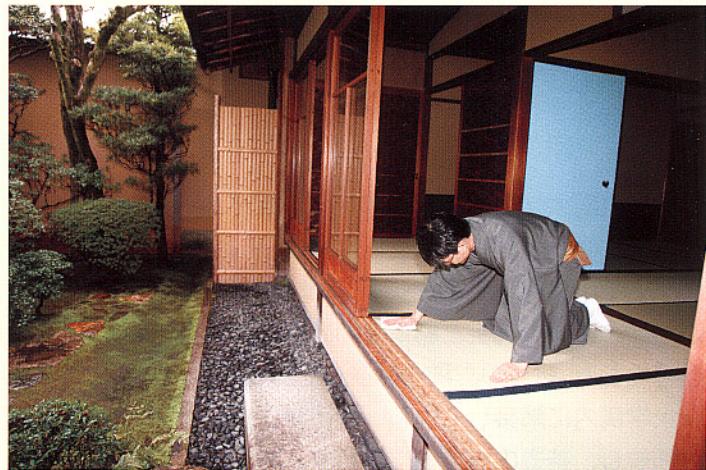
茶道を通して私たちは、昔から続いてきた奥深く素晴らしい日本の文化を知るとともに、礼儀作法を学び、身につけることで、普段の立ち居振る舞いにもそれを生かすことができ、私たち自身のスキルアップにも繋がっています。

お茶会に来てくださった方々や後輩たちに茶道という素晴らしい文化を伝えるために、これからもお稽古を重ね、皆で努力していきたいと思います。

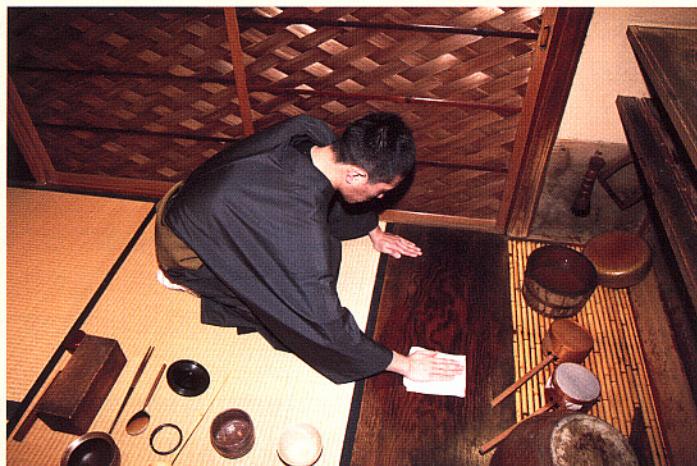


# コラム

家元の玄関（内弟子）は、寝起きを共にして茶家の生活を学んでいます。その生活中で、日々の勤めとしての行いが掃除です。起床後には、まず身支度を整え、雨戸を開けます。茶室、水屋、廊下など、土壁や障子紙を傷めぬよう叩きをかけます。その後に箒で塵や埃を掃きますが、畳の目に沿うよう、塵埃が舞わないように注意をはらいます。そして天井、障子戸の桟、木戸、柱、畳などを固く絞った雑巾で拭き清めます。廊下なども雑巾掛けをし、雨戸や瀧縁なども拭き清めます。



家元では釜を掛ける機会が多数あります。掃除以外にも手配すること、準備することは沢山ありますが、掃除にかける回数や時間が一年の多くを占めています。



茶室内は清浄が第一です。物事の清浄が、心の清浄にも繋がってゆくと思います。茶会当日には点前や立居振舞などの目に見える所作も大切です。しかしながら日々の生活や活動に於いての心掛けも、大切なことの一つです。

七代家元の如心斎は、「常を茶になせ」ということばを残しています。

つまり日常そのものの「掃除」と、常では触れられない世界である「家元」での生活とを通して、自己を見つめ、発見する機会を得るということが自身の向上にも繋がってゆくことなのかもしれません。

# お知らせ

家元では、表千家学校茶道登録校を対象に各種の催しを行なっております。申し込みは、ハガキに下記の要領で記入し、それぞれの締切に間に合うように投函してください。応募多数の場合は抽選となりますのであらかじめご了承ください。結果は書面で通知します。

## ～学校茶道研修会～

大学・高校の茶道部を対象に、家元見学と講話をを中心とした研修会を行ない、家元のお茶にふれています。

- ◆場所 不審庵（表千家家元）  
(京都市上京区小川通寺之内上ル)
- ◆内容 ①祖堂参拝  
②見学 不審庵・残月亭・家元露地  
③呈茶・講話
- ◆開催日時  
平成23年7月27日（水）  
平成23年7月29日（金）  
(両日とも下記の組分けで行います)  
1組／午前9時～午前11時  
2組／午前10時～正午  
3組／午前11時～午後1時  
4組／午後1時～午後3時  
5組／午後2時～午後4時  
6組／午後3時～午後5時
- ◆申込資格 表千家学校茶道登録校の茶道部  
(先生の引率があること)
- ◆参加費 1,000円（1人）
- ◆参加人数 1校あたり10名くらいまで  
引率の先生は2名まで
- ◆申込締切 平成23年6月10日（金）必着

## ～学校茶道夏期研究セミナー～

大学生を対象に茶の湯の知識を幅広く身につけていただくための研究講座を開催します。

- ◆場所 表千家北山会館 研修室  
(京都市北区上賀茂桜井町61)
- ◆内容 講座（茶の湯の歴史、茶の湯の道具、茶室と露地など）、意見交換、家元見学
- ◆開催日時 平成23年9月3日・4日の2日間  
9月3日(土)午前9時30分～午後5時  
9月4日(日)午前9時30分～午後4時  
※1日のみの受講はできません
- ◆申込資格 大学・短期大学の学生
- ◆参加費 1名につき2,000円（昼食代含む）
- ◆参加人数 各校茶道部より代表者1～2名ずつ
- ◆申込締切 平成23年7月30日（土）必着



## ～学校茶道指導者研修会～

学校茶道に携わる先生方にお集まりいただき、研修会を開催します。

- ◆場所 表千家北山会館 清友ホール  
(京都市北区上賀茂桜井町61)
- ◆内容 学校茶道指導のうえで最も基本的な事柄について、実技と解説を行ないます。
- ◆開催日時 平成23年10月27日（木）  
午後1時～午後4時30分
- ◆申込資格 学校茶道指導者及び顧問の先生
- ◆参加費 無料
- ◆申込締切 平成23年8月31日（水）必着
- 家元見学があります（申込ハガキに希望の有無を書き添えてください）。
- 10月28日（金）に大徳寺聚光院で利休忌の法要があります。ご参詣を希望される場合は、その旨お書き添えください。
- 当日は北山会館特別展の展観と呈茶があります

### 申込ハガキの書き方

#### 月 日「(催しの名称)」参加希望

- 学校名 ●学校番号
- 学校の所在地
- 申込者  
氏名  
住所  
電話番号
- 先生名(申込者と同じ場合は不要)
- 先生会員番号(同門会会員のみ)
- 希望の組(時間)
- 参加人数  
先生 名  
学生 名
- 参加者氏名(※)

※指導者研修会と夏期研究セミナーは参加者全員の氏名を記載してください。

# お知らせ

## ～不審庵短期講習会について～

不審庵短期講習会は、若い世代を家元に迎えて茶道の修練を行なう講習会です。

一週間のあいだ家元講師の指導を受け、同年代の人たちとの交流や規律ある合宿生活を通じて、茶の湯を理屈でなく、体験することの大切さを学んでいただきます。

千利休を祀る祖堂を参拝し 400 年の伝統をうけつぐ茶室と露地のたたずまいの中で、家元の畳に座り、基本の稽古をおこないます。茶道を習う上での心構え、茶道史や茶室についての講義や大徳寺の参拝など、表千家茶道の次代を担う人材を育成するための教課が用意されています。

申込条件は、満年齢が 20 歳から 25 歳までで、「習事」の相伝を受けていること。また、師事している先生の推薦が必要です。

平成 23 年夏期

1 組 8 月 31 日 ( 水 ) ~ 9 月 6 日 ( 火 )

2 組 9 月 3 日 ( 土 ) ~ 9 月 9 日 ( 金 )

平成 24 年春期

1 組 2 月 29 日 ( 水 ) ~ 3 月 6 日 ( 火 )

2 組 3 月 3 日 ( 土 ) ~ 3 月 9 日 ( 金 )

受講料 5 万円（期間中の宿泊・食事代を含む

ただし交通費は自己負担）

問合先「不審庵事務局短期講習会係」

電話 075-431-3281

## 「合宿の道具貸出し」ご案内

家元では茶道部の合宿などで使用するための道具（写真は一例）を無償で貸出しております。ただし、お送りすることはできませんので、本部の学校茶道係まで取りにきていただくことが条件です。

合わせて、合宿のご相談も受けております。場所は家元の近くの寺をご紹介しております。

また、授業やクラブで使用するための茶の湯の教材映像を貸し出すことができます。詳しくは学校茶道係までお問い合わせください。

問合先「不審庵事務局学校茶道係」

電話 075-432-2195



## 表千家青年部のご案内

表千家青年部は、18 歳から 45 歳までの不審庵入門者の集まりです。同門会各支部の指導のもと、若い世代が茶の湯を通じて交流を深める場となっています。

現在、全国 38 地区で活動の輪が広がっており、北海道より、旭川、札幌、函館、釧路、青森、宮城、山形、東京、千葉、埼玉、神奈川、群馬、栃木、山梨、長野、静岡、愛知、岐阜、新潟、富山、石川、福井、京都、大阪、和歌山、奈良、岡山、備後、広島、山口、島根、香川、福岡、大分、長崎、熊本、鹿児島、佐賀の各地区で発会されています。

青年部では、各地区ごとの企画運営により、茶会や茶の湯に関する講演会をはじめ、茶の湯研究や茶花・懐石料理・茶の工芸の体験講座、家元や茶の湯の縁のある古刹・美術館の見学旅行などが活発に開催されています。

学校茶道で表千家のお茶にふれられた方々には、進学もしくは学校卒業後、「表千家青年部」に入会され、一層、茶の湯文化への理解を深められることを願います。進学・就職等による転居先での入会も受け付けております。

問合先「不審庵事務局青年部係」

電話 075-431-3281